

# 「椿子物語」考

出原博明

(1)

「椿子物語」を読んでいて、私は、おや、と小さな驚きをおぼえた。虚子はここでめずらしく素肌を見せてしまったのでは、と。それは、作品の冒頭近くで老虚子が赤い椿の幻影を見る件りであるが、これについては、のちに(3)で詳しく考えてみることにする。この文章は、そののところに光を当てることによって、この巨人の一面を読みとろうとするところみである。

さて、余裕派とは、漱石が虚子の小説集『鶏頭』のための序文の中で用いた言葉であるが、これは、見事に虚子の小説の正鵠を射ている。同時に、これは、子規をはじめ漱石や虚子が一緒に研鑽に励んだ写生文というものを支える態度でもあろう。そして、虚子の小説の殆どは、この写生文の方法に拠るものである。

漱石は前記の序文の中で、それらを「余裕のある小説」として分類して、「余裕のある小説とは逼らない小説である。『非常』と云ふ字を避けた小説である。不断着の小説である。」<sup>1)</sup>と説明している。しかし、例えば、虚子の代表作とされる「柿二つ」という作品などは、『鶏頭』所収の作品と同様に写生文の方法を適用しておりそれは余裕派の客観写生といえるかも知れないが、ことテーマに関しては決して「『非常』と云ふ字を避けた」という底の

ものではない。

漱石は、「余裕のある小説」の対立物として「余裕のない小説」という考えを立てて、「この種の小説の特色としては人生の死活問題を拉し来って、切実なる運命の極致を写すのを特色とする。」と定義づけているが、「柿二つ」の場合は、方法は前者のものであるが、その対象と内容は、後者に属するものといえよう。

ところで、このことはこのこととして、肝心の「椿子物語」にとりかかる前に、ここで暫くこの代表作「柿二つ」を実例として、虚子の書き方の姿勢と傾向について指摘しておきたいことがある。

この小説のテーマは、有り体に言って、病床に病臥した子規の死に至るまでの経過である。登場人物たちは、それぞれのイニシャルやそれと判る外面的特徴などで暗示されているが、全て実在の人物らしくて、関係者にはすぐにどれが誰であるかが見分けがつく仕組みになっている。例えば、語り手のKは虚子であり、Sは子規である。

結核性の病気で床に臥しているSの病状がますます進行していった遂には死に至るまでが描かれている。具体的に死というものに絶えず直面して生きなければならないSの日々とそれを取り巻く周囲の人達との関係。Sが実際に死というものと向き合ってどのように生きたか、ということ。

ときには、Sの視点から書かれている箇所もあるが、それでさえ、結局は、Kが想像力をはたらかせて、Sの身になってSの口を借りて語っているのだ、という印象を与える。つまり、その部分もKのほうの思いであり、観察の結果なのである。彼は、こんなに深刻な対象を描くに際しても、感傷や情緒に流されることは露ほどもなくて、客観写生の方法に徹している。外的事実を淡々と叙していく。この場合、それがかえって効果的にはたらいて、Sの断末魔とそこへ至るまでのプロセスが、耐え難いほどの生々しさを迫ってくる。

母や妹も今朝の珍しい平穏な容體に安心して茶の間で落ち着いた朝飯を取った。

## 「椿子物語」考

けれどもそれも午後迄は続かなかった。脚部の水気は一日一日増して、仰臥した儘の姿勢を少しでも動かさうとしたら忽ち痛みを覚えて大叫喚を始めるのであった。殊に脚は曲って立てた儘になってゐて、其を延ばすことも横に寝かすことも出来無かった。初めは蒲団を枕にしてゐたが今は其でも十分の支へものとはならなかった。其処で大方は妹が手を其膝の処へ添へてちつと其を支へてゐた。其は見てゐても苦しきさうな姿勢であった。

「少し代りませう。」とKは妹に言った。

「其はなかなかむづかしいぞな、一寸でも動いたら大変なのだからな。」と彼〔S〕は言った。

「大概出来無いことはあるまい。まあ遣って見やう。」

Kは今迄妹の坐つてゐた処に坐つて其脚に手を添えた。

「臭いぞな。」と彼は又注意するやうに言った。枕頭に坐つてゐる時と違って不浄の臭気が鼻を打った<sup>2)</sup>。

これは、Sが息を引き取る3日ほど前の状態の描写である。Sが、今、重病の臭気を放っているのは確かだ。しかし、作者がそれを単に「臭気」とはいわずに、もっと突き放して「不浄の臭気」と言つてのけたところに、私は注目する。(ちなみに、彼は、「死」というタイトルの章の中の、引用部分も含めて僅か2頁足らずのこの節内で「不浄の」という形容を容赦なく3度も使用している。)虚子という人物の性格には、いったいに、対象が何であれそれを冷徹に見据える、或いは、そういうことを為し得る非情なところがある。

このことは、彼の俳句作品についてもいえよう。例えば、「大寒や埃のごとく人死ぬる」「黄金虫擲つ闇の深さかな」「酌婦来る火取虫より汚きが」など、枚挙にいとまがない。

「柿二つ」にも、この姿勢が貫かれている。しかし、この作品の語り手としての役割をも担っているKという人物つまり虚子自身が対象になった場合はどうであろうか。なるほど、彼も、決して凝視されていないわけではない。

だが、その凝視はSに対するときほどには冷徹ではない、といえるのではないか。Sに対しては、時に、意地の悪い視線さえ向けているが、Kは、そういうものの埒外に置かれている。

このことは、ここでKというイニシャルで表わされているのが作者である虚子自身だということを考えれば、ある意味では、一般的には当然のことかも知れない。けれども、近・現代、20世紀の小説ということを考えるとき、そこには、作者自身の分身とおぼしき人物とその内面をもっと突き放して容赦なく分析したり抉り出したりするという傾向がある、といえるのではあるまいか。(例えば、虚子の文学活動とも深く関わっていた漱石の場合でも、この傾向が顕著である。) だが、これに対して、「柿二つ」の語り手兼主人公Kの内面は、追究されていない。きわめて、平面的に常識的に提示されているだけだ。

それは、いったんはKを非難したSがそれを後悔して謝りの手紙を寄越してきたことに狼狽えてみたり、病気に追いつめられていくSを可哀想とおもったりする、彼の様子である。同時に、死の接近に直面して今は新聞に「墨汁一滴」というタイトルの連載文を書くことが唯一の精神的救いになっている矢先に、新聞社内にその欄を廃止すべきだという意見が出ているのを知ったSが動転して、それを存続させてくれるように嘆願書を編集部に届けるところや、僧職にある弟子が好意から便宜をはかって貸してくれた非常に貴重な絵を欲しがり、その弟子ののっぴきならない事情故の再三の拒否にもめげず駄々をこね通して、遂にそれをせしめてしまうSの度を超した我が儘ぶりなど、そういうものに対するときの、又は、そういうものを描き出すときの、いささか意地が悪いとさえ思わせる底の冷徹な視線が、虚子自身の分身である筈のKに対しては向けられることはない。

このことは、この「柿二つ」に限らない。

虚子の小説は、総じて、作者が実際に経験・見聞したことを書いているという点からでも、私小説の一種とすることができよう。しかしながら、その私小説の中で大概の場合語り手の役割を担う作者自身らしい人物の内面が読

## 「椿子物語」考

者の前に引き出されて容赦なくメスを入れられる、ということは殆どない。作者の内面の深部は、読者の目から隠されている。作者とおぼしき語り手は、多くは、どちらかといえば、傍観者の当事者とでもいえそうな姿勢を保っている。

はじめに「椿子物語」を読んでいて、おや、と小さな驚きをおぼえたと私が言ったのは、上記のような彼の小説の傾向を踏まえた上でのことである。つまり、このような彼の傾向に対して、「椿子物語」は作者が自分の内面の深部にあるものを読者の前に、思わずさらけ出してしまったところがある、というのである。但し、この場合でも、その内面を追究したり分析したりすることは遂にないのであるが。

「椿子物語」は、椿子という名の人形を媒体としての、75歳の老虚子と21、2歳の令嬢叡子との恋物語である。そして、登場人物は全て実名で語られている。

私が「椿子物語」に特に注目した主な理由は、既に言及したとおり、この作品の中で、虚子には珍しく、自己の内面が思いがけずさらけ出されているからである。いったいに、写生文といい、余裕派といい、これらのレッテルも仄めかしているように、虚子の小説は、既に指摘したとおり、語り手又は作者の内面は抑制して表に出さない、という傾向がある。ところが、「椿子物語」は、この点で、いささか異なるのである。

このことに関して最も注意すべきは、椿の花のイメージをめぐるの件りである。虚子は次のように書いている。

私は椅子に腰を掛けて、此の赤い椿の花を眺めてゐた。心はいつか旅路をさまよって居るやうな感じになった。其の旅路といふのは東海道とか中仙道とかいふのではないのであって、自由自在に動いて行って、とりとめもなく天地をさまよふ、といふやうな感じであった。さうして此の赤い椿は私を取り囲んだ女の群になって、いつも身辺に付き添うてゐるやうな感じであっ

た<sup>3)</sup>。

この件りは、ひどく性的で生々しいものを感じさせる。このことも、虚子にしては、珍しいことである。といっても、私は、虚子の小説が性的で生々しいものを描かないと言っているのではない。確かに、彼の小説は、そういうものをも対象にすることはある。しかし、それを彼自身の内面に巣くっているものとして、あけすけに表へ出すということはしていないのである。

ところが、ここでは、虚子自身の内面にそういうものがとぐろを巻いて存在している、ということさらけ出してしまっている。

さしもの虚子もこの頃は、老齡故に肉体が弱ってきていて、いろいろと危険があるので、独り歩きを禁じられていた。こういう物理的に閉じこめられたような生活の中では、当然、空想が活発になる。

今此処に腰を掛けて、赤い椿の花に埋もれて、じっとその花を見つめて居ると、いつか浮雲にでも乗ってゐるやうな心持になって、自分は自由自在に心の欲する処に行く事が出来、足は軽やかに空中を踏んで歩き廻ることが出来るやうな幻覚を覚えるのであった<sup>4)</sup>。

先の引用部分での、赤い椿の花を自分の身邊に付き添う女人の群、と感じるのも、やはり、一種の幻覚といえよう。しかし、こういう場合の幻覚というものには当人の意識の深部に潜んでいるものが表わされていることが多々ある、ということは、心理学の証明を待つまでもない、自然で常識的な現象だ。これは、明らかに、性的なイメージである。そして、意識の底に潜んでいるものがイメージの形を取って暗示的に姿を見せる、ということも又常識であろう。そして、文芸の創作者達は、登場人物の内面を伝えるために、この幻覚や夢の中に出てくるイメージを利用するのである。

しかし、かといって、よく見かけるのだが、これに精神分析の手法を適用して、このイメージの表わしているものはこれこれしかじかのものである、

## 「椿子物語」考

と図式化するのでは、身も蓋もないものとなって、白けてしまう。

ところで、高齢の男性が身近に居る若い女性に思いを懸けるという現象は、内外の名作の中で、モチーフとして結構取り上げられている。例えば、John Galsworthy の *The Forsyte Saga*<sup>5)</sup> に於ける Old Jolyon は甥 Soames の妻である Irene を愛してデートをするが、85歳という高齢のため途中で逝去する。彼は、遺言によって、14萬5千ポンドという遺産の中の1萬5千ポンドをこの自分とは血縁関係のない女性に贈った。中には、Scott Fitzgerald の *The Great Gatsby* に登場する億万長者 Dan Cody のように、Ella Kaye という若い悪女の手練手管に引っかかって全財産を巻き上げられてしまう老人もいる。

日本の小説では、川端康成の『山の音』や谷崎潤一郎の『瘋癲老人日記』あたりが、これの良い例ではないだろうか。どちらも、高齢の男性が息子の嫁、つまり義理の娘に懸想するということをモチーフにしている。それぞれに、なかなかの作品である。それは、老人の性という問題に深く根ざしている。

私はここで、その舞台も時代も「椿子物語」とほぼ同じである『山の音』に注目する。この作品と対比することが、「椿子物語」と虚子の像を明らかにするのに幾らか役立つのではないか、と考える。

### (2)

川端康成の『山の音』の舞台も、「椿子物語」と同じく鎌倉である。尤も、こちらは、主人公信吾の勤務先がありヒロイン菊子の実家もある東京へも、時々、舞台を移しはするのだが。

更に興味深いのは、この『山の音』の連作が、虚子の「椿子物語」の発表年を含む数年に亘って諸雑誌に発表されているということである。つまり、『山の音』連作と「椿子物語」はほぼ同時期にこの世に産み出されたのであ

る。

虚子全集の年譜によれば、『椿子物語』刊は昭和26（1951）年6月となっているが、川端康成は『山の音』の連作発表を「改造文芸」昭和24（1949）年9月号で始め、その後毎年、「世界春秋」や「文学界」などの誌上に発表し続けて、昭和29（1954）年に完結させ、同年筑摩書房から単行本として刊行している。（但し、分量的には、「椿子物語」の方は、『山の音』連作の一回分よりも短いかも知れない。）

『山の音』の主人公信吾は、義理の娘菊子を特別に可愛がる。信吾は62歳、菊子は20歳を出たばかり。（「椿子物語」の主人公虚子は75歳、ヒロインの叡子は21、2歳。）菊子は息子修一の妻である。修一は終戦後南方からの復員兵として帰国したあと信吾の会社に勤めている。彼は結婚後2年足らずで絹子という戦争未亡人と不倫の関係になっていた。菊子はそのことを知っていて、表には出さずに耐えているのだった。

信吾には、修一の上に房子という30歳くらいになる娘があった。こちらも結婚していたが、その結婚生活はうまく行っていなかった。夫は墮落して社会の敗残者となって家庭を顧みない。結局、彼女は、幼い女の子二人を連れて実家へ戻ってくる。

菊子は美しく、房子は醜い。菊子は、素直で、情がこまやかで優しい。房子は、ひねくれている、思いやりが乏しくて情が強い。

信吾も彼の妻の保子も、実の娘である房子を好きになれなかった。信吾は、この実の娘よりも菊子のほうに愛情を注いでしまう。しかも、その愛情の根底には、単に義理の娘としてだけではなくて、どうやら男と女の間の性・エロスに繋がるものが潜んでいる、ということに気付いて、戸惑う。

信吾の妻の保子は彼より1歳年上であったが、器量がよくなかった。彼女の姉は美人であって、信吾は憧れていた。だが、彼女はとてもハンサムな他の男性に嫁いで20歳代で早逝してしまい、信吾はやむなく彼女の妹である不器量な保子と結婚した、という経緯がある。

可憐で美しく優しい義理の娘菊子、良き若妻がありながら戦争未亡人絹子



## 「椿子物語」考

とサディスティックな性関係をつづける息子修一、夫にもあまり愛されることもなく結婚生活も破綻して二人の幼子連れて実家へ戻って来た、容姿が醜くてひねくれた性格の、実の娘房子、6歳と乳飲み子という二人の孫娘、必ずしも愛し合って結婚したわけではないが自分との長い長い結婚生活を共に無事に過ごしてきた不器量な年上の妻保子。同じ屋根の下で暮らすこれらの家族たちを、信吾は静かにじっと見守っている。

62歳の信吾の耳に、時に、山の音とおぼしき音が聞こえるようになった。幻聴のようでもあり、それが本当に山からの音かどうかは定かではない。老いゆえの現象のようでもある。また、最近物忘れがひどくなった。物故者たちがよく夢に出てくる。同窓生の誰彼が亡くなってゆく。家族のみならず彼と接点を持つ家族以外の人達の生活の営みをも信吾は見つめている。

この作品は夏に始まり、季節の移り変わりに従って静かに変化していき次の年の秋に終わる。信吾は若い頃に俳句を少したしなんだことがあるということにもなっていて、時に季語や俳句への言及もある。

彼を含めた家族やその他の登場人物たちのこの世を生きてゆく様子が、自然の、四季の移り変わりを背景にして、淡々と語られていく。読み進むにつれて、無常感がひしひしと伝わってくる。これは、日本文化の底に流れる伝統的な思想の一つである。しかも、それが観念的ではなくて、読者が信吾と一緒にそれを具体的に体験して直に味わえるように仕組まれている。四季の移り変わり、自然によって心の傷を癒されながら生きてゆく人間の営み、無常観、こうした日本的なものが知らず知らずのうちに、しみじみと読む者の内面に染み通ってくる。

しかしながら同時に、ここにはひどく西洋的な小説の方法が用いられているということにも注目する必要があるだろう。それは、具体的には、20世紀の心理小説のそれである。(語り手の内面をもつき放して分析し追究してゆく。虚子の方法とは大きく異なる。)

主人公で語り手の信吾は、彼を取り巻く自然や人事に目を向けるばかりではなくて、常に自己の意識の深層に在るものを見極めようとしているのだ。

いや、むしろこちらの方に重点が置かれていると言ってもよいほどである。

例えば、信吾は或る夜、息子修一の友人の妹と愛もよろこびもない性交渉をもつという厭な夢を見る。相手は処女だったようだ。どうしてこのような夢を見たのか不審に思い、経緯を辿って綿密に分析していく。

信吾は、今回に限らず、近年見たみだらな夢の相手が皆下品の女だということに思い当たる。それは、どうやら、夢でまで姦淫の道徳的呵責を恐れているかららしい。

信吾は、現実に於ては、菊子が嫁に来る前に、今回の夢の相手となった女と修一との間に縁談があって少し交際もあったということを思い出して、「あっ」と雷に打たれたような衝撃を受ける。

その深層に潜んでいるものを信吾は掘り起こして次のように分析している。

夢の娘は菊子の化身ではなかったのか。夢にもさすがに道徳が働いて、菊子の代りに修一の友だちの妹の姿を借りたのではないか。しかも、その不倫をかくすために、呵責をごまかすために、身代りの妹を、その娘以下の味気ない女に変えたのではないか。

もし、信吾の欲望がほしいままにゆるされ、信吾の人生が思いのままに造り直せるものなら、信吾は処女の菊子を、つまり修一と結婚する前の菊子を、愛したいのではあるまいか。

その心底が抑えられ、ゆがめられて、夢にみすぼらしく現われた。信吾は夢でもそれを自分にかくし、自分をいつわろうとしたのか。

菊子の前に修一と縁談のあった娘に仮託、しかもその娘の姿も空漠としたのは、女が菊子であることを極端に恐怖するからではなかろうか。

また後から思い出すと、夢の相手がぼやけ、夢の筋道もぼやけて、よくおぼえていず、乳房をさぐる手のところよさもなかったのは、目ざめ際に、もう狡猾なものが機敏に働いて、夢を掻き消したのかとも疑われた<sup>6)</sup>。

信吾は、いかにも、繊細で鋭い感受性と知性をもって現代という時代に揉

## 「椿子物語」考

まれて生きているインテリゲンチヤの面影を彷彿させる。意識の中身も随分と複雑そうだ。

彼の知覚の鏡に次々に映し出される事象には戦後という時代の翳が色濃い。

先ず修一は、兵隊として南方にいた間に相当性生活の面でも荒れた経験をしてきたらしいということを窺わせる。その延長線上に戦争未亡人絹子との性生活も展開しているとおもわれる。

修一の若妻菊子は、年齢が若いというだけでなく、擦れたところが微塵もなく、純粹で幼い。性質が良い。可憐で可愛い。

皮肉なことに、修一に絹子という女があるということで、かえって修一と菊子との男と女の関係は深まっていく。同じ屋根の下で暮らしている信吾にはそのことが手に取るように判るのだった。

このような生活を営んでいるうちに菊子は身籠もる。けれども、彼女は、潔癖から、その子を人工中絶してしまう。彼女の潔癖とは、信吾に女がある限りは産みたくない、というものであった。彼女は悲しみ、人目に隠れて忍び泣く。そして、東京の母の許へ暫く帰る。

更に、これは後で判ったことだが、この人工流産の費用に、修一は愛人絹子から貰った金を当てていたのだった。（このことは、菊子は知らずにすんだのだが。）それがどれほど妻菊子を侮辱するものであるかということが分からないのか。修一にはこういう無神経なところがあった。

房子の行方不明になっていた夫相原が伊豆の蓮台寺温泉で25、6歳の女給風の女と心中した、という記事が新聞に出る。女は死んだが、麻薬の常用者らしい男（相原）の方は生命はとりとめそうだ、という。かつて相原から房子宛に送付してきていた離婚届を信吾は、微かな希望を捨てきれずに保持していたのだが、それを慌てて役所へ届けた。

菊子が人工中絶したのとほぼ同じ時期に絹子のほうも妊娠していた。修一は彼女に産まないでくれと頼むが、拒否される。

このような状況を知った信吾は驚き、彼も絹子に直接会って中絶するように説得しようとする。しかし、彼女に聞き入れて貰うことは出来なかった。

絹子は現在経営している洋裁店はたたんで故郷の田舎へ帰りそこで子供を産んで自立して生きていく、と決心しているのだった。修一とは既に別れており、一切迷惑はかけない、という。信吾は彼女に手切れ金を渡して引き返すより術がなかった。

人工中絶した悲しみを抱いて暫く母の許へ帰っていた菊子が、婚家へ戻るに際して先ずとった行動は、義父の信吾を電話で呼び出して新宿御苑で二人きりでひとときを過ごすということだった。二人の仲むつまじい関係が、楽しい言葉のやりとりや菊子が信吾に寄り添ってくる所作などをとおして描写されている。この時の信吾は、このような環境に二人きりでいることにどぎまぎして落ち着かない様子である。

菊子は婚家へ戻ってくるが、その後も、信吾がちょっとうしろめたさを感じたこの日のデイトのことは家族の誰にも洩らすことがないようであった。

菊子は戻って来たとき、家族のそれぞれにプレゼントを持参したが、帯紐や子供服や折りたたみ蝙蝠傘などの中であって、信吾へのそれが群を抜いてとびきりのすぐれ物であった。それは、その頃はまだ珍しい和製の電気剃刀だったが、妻の保子も「これが福引きだったら、お父さまのが断然一等ですよ。菊子のことだから、それはそうですよ。第一、音がして、動きますでしょう。」などと言う。信吾は、あれこれ試してみながら上機嫌であった。

しかし、信吾が、既に言及したように、夢の中で、菊子の化身とおぼしき若い女（修一の友人の妹）と性の交渉をもったのは、厭な出来事の続いたあとに訪れたこの平和で平穏に見える暮らしの最中に於てであった。

信吾は、やはり、菊子と自分との間に或る危険を感じていた。

彼は、菊子と修一の夫婦関係がほんとうに健全で幸福なものになるためにも、二人はこの家を出て自分たちと別居すべきだと考える。

彼がそれを菊子に伝える次のような場面がある。

菊子は生け終ったからす瓜を、と見こう見していた。

信吾もその花をながめながら、

## 「椿子物語」考

「菊子、別居しなさい。」と唐突に言った。

菊子は、はっと振り向いて立ち上ると、信吾のそばへ来て坐った。

「別居はこわいんです。修一がこわいんですの。」と菊子は保子に聞えぬ小声で言った。

「菊子は修一と別れるつもりがあるのか。」

菊子は真剣な顔になって、

「もし別れましたら、お父さまにどんなお世話でもさせていただけると思いますの。」

「それは菊子の不幸だ。」

「いいえ。よろこんですることに、不幸はありませんわ。」

初めて菊子の情熱の表現であるかのようで、信吾ははっとした。危険を感じた。

「菊子がわたしによくしてくれるのは、わたしを修一と錯覚してなんじゃないの？ それで、かえってなお修一にへだてがあるように思うんだよ。」

「あの人には、私にわからないところがありますわ。ときどき、不意にこわくなって、どうしようもありません。」

と菊子は白い顔で訴えるように信吾を見た。

「そう、あれも戦争に出たから変わった。わたしにも本心のあり場をつかめなくするんだな、わざと……。しかし、さっきの話じゃないが、ちぎれた血まみれの耳みたいに、無造作にくっつけると、うまくゆくかもしれないね。」

菊子はじっとしていた<sup>7)</sup>。

この「さっきの話」というのは、少し前に保子が信吾に話して聞かせた新聞記事のことである。それによると、ニューヨーク州バッファローで一人の男が自動車事故で左耳を落として医院へ駆け込んだ。すると、医者は現場へ駆けつけて、血まみれの耳を探して拾って帰り、その耳の傷あとにくっつけた。その後もずっと、耳はそこに工合よくくっついている、とのことである。

信吾がこれを比喩に使うってここで言わんとしているのは、菊子と修一の夫

婦関係もこのようにうまく修復することが可能ではないか、ということである。

上記の引用部分で、信吾と菊子の関係の中に潜んでいる危険、修一が引きずっている戦場での体験の心的深傷、が暗示されていることは明らかであろう。

信吾はそれらの事象を見つめて悩んでいる。彼は、理性的に処して、こういうのっぴきならぬ窮境から菊子たちを救いだし、自分自身も健全な精神生活を取り戻したい、と願っているかのようである。(彼がとりわけいちばんに願っているのはひそかに愛している菊子の幸せ、だろう。)とはいえ、娘の房子とその子供たちのことも含めて、おいそれとはなかなか問題は解決してくれそうにはないのであるが。

(3)

『山の音』の信吾に比べて、「椿子物語」の主人公虚子は何とあっけらかんとしていることだろう。何と図太いことだろう。信吾が剃刀とすれば、虚子は鉈である。

この物語は、語り手で主人公の私(虚子)が鎌倉の俳小屋の椅子に腰を掛けて庭を眺めているという状況で始まる。

虚子は終戦後3年ほど経ってから疎開先の小諸から鎌倉へ戻ってきた。もとは子供の部屋であったのを仕事場、つまり俳小屋、として使っているのだった。疎開期間は別として40年間ここで暮らしてきたのだが、庭の草木は乱雑をきわめてはびこっていた。とりわけ、椿の木が多くて、その赤い花が今咲き誇っている。山椿と呼ばれる種類で、「花は天辺から根元に至るまで椿全体を押し包んで居るやうに咲き満ちて、盛りになると、殆ど他の木は目に入らないやうに此の赤い椿が庭を独占してゐるのである。」<sup>8)</sup>

この盛りの赤い椿を眺めているうちに、虚子の心はいつしかふわふわと旅路をさまよっているような感じになり、とりとめもなく天地をさまよう感じ

## 「椿子物語」考

で、「さうして此の赤い椿は私を取り囲んだ女の群になって、いつも身辺に付き添うてゐるやうな感じであった。」

既に指摘したとおり、これは明らかに性的イメージで、しかも何と瑞々しく色っぽいことだろう。この時の虚子は既に75歳になっていた筈である。

丁度その頃山田徳兵衛という人が7、8歳かとおもわれる女人形を送ってきた。椿の盛りの時期だったので、虚子はこれを「椿子」と名付けて本箱の上に置く。そして、次のような小唄を作る。

女人形を お側に置いて  
明け暮れ眺めしゃんすが 気がかりな  
わしや人形に 愒気する<sup>9)</sup>

これにもなかなか色気がある。

それから3年の歳月が経つ。虚子は敗戦後3年過ぎてから鎌倉へ戻っているから、この作品の書き出し部分の時期がその年だったとしても、それから更に3年を経た今は昭和26年頃ということになる。この時間的位置からの回想で去年の暮、つまり昭和25年暮にこの小説のヒロイン安積叡子が丹波の和田山から初めて訪ねてくる。その地の虚子の弟子古屋敷香葎が、たまたま上京していた彼女を同伴して来たのだった。

その丹波へ、虚子は終戦の年に旅行していた。その際虚子は、まだ15、6歳とおもわれる少女の叡子に一度だけ遭っている。といっても、特に言葉を交わすこともなかったようだ。それは、次のような経緯だった。

この丹波行で虚子は弟子や息子年男の家などに合わせて5泊ほどしているが、その最後の投宿先が安積素顔という弟子の屋敷であった。素顔は網膜剥離で目が見えなくなって同志社大学を中退したあと、和田山一の旧家の主として父祖伝来の財産を護ることに専らの生活を送っていた。彼は表に出て我が家の客人となった師虚子を案内するのだが、普通の盲人のように杖をつくことはしなかった。「無造作に一人の少女の肩に手を掛けて、それで目の見

える人同様に歩くのであった。その少女というのはセーラー服を着て髪を束ねて後に垂らしてゐる十五六の少女であった。それが紀陽君の話にあった素顔君の長女の叡子さんであった。」ここに登場した少女叡子はそのときは一度も口を開くことがない。彼女は黙って肩を貸しながら歩くばかりだった。

一行が町を離れて野路をゆくと川があった。その橋の上に立って、「この川は蓼川といふのです。」と言ったまま素顔は深い沈黙に落ちる。目はあらぬ処を見つめたまま、素顔は暫く沈黙をつづける。「その間、叡子さんは淋しさに素顔君のそばに立って居た。叡子さんは始めから終りまで一言もものを言はなかった。暫くその橋の上に、主客ともに沈黙の数分を過ぎて後ち漸くに歩を返した。素顔君は又叡子さんの肩に手を置いてもと来た路を家路に向った。」

このような少女叡子を虚子が目にしたのは敗戦の年であり、今回、鎌倉の虚子宅を香葎に連れられて彼女が訪ねて来たのはその数年後ということになる。ということは、その時叡子はもう21、2歳になっていた筈である。(これは、『山の音』の菊子とほぼ同年齢である。)

この時の叡子の印象を虚子は次のように描いている。

久しぶりに逢った叡子さんは、昔、素顔君に肩をかして黙々として歩いて居った一少女とは見違へるほどに人と成ってゐた。昔は沈黙であった一少女も、今はこちらの問ふ事に対してはきはきと返事をした。物に臆するやうな処は少しもなかった。.....

.....  
小さいコップに一杯づつの酒をついで御飯の前にその盃を挙げて互の健康を祝し、殊に叡子さんが何ものにも煩はされずすくすくと素直に伸び育って来たことを祝福した。それはほんの口を湿ほすほどの少量の酒であったが、御飯をたべて居るなかば頃から、叡子さんの顔はだんだんと赤くなってきた。老妻は笑って

「まあ、叡子さん、まっかになって。」



## 「椿子物語」考

と言った。

叡子さんは黙って頬をおさへ、席をかへて坐ったが、その顔は愈々赤くなって来た。香律君も笑ひ、私も笑った。

私は此の時の叡子さんを美しいと思った。嘗て素顔君に肩を貸して黙って蓼川までの道を歩いて行った時の陰気な淋しい面影は払拭されて、つつましやかではあるが、快活で、それで今斯く目のあたりに見て、別に装ひを凝らしてゐるとも思へない顔を真赤にして、一杯の酒の酔を持ってあましてゐるらしい。それを大変美しいものと眺めた<sup>10)</sup>。

表現を抑制してはいるが、この若い女性をどんなに虚子が気に入ったかが生き生きと伝わってくる。この初々しく美しい女性を慈しみのこもった目で眺めながら、虚子の心身は華やき躍動している。

「この女この時艶に屠蘇の酔」「美人手をかせばひかれて老涼し」これらは後に虚子が叡子に寄せる思いを作品化したものである。

次の年も庭の椿が真っ赤に咲いた。虚子はふと思ひ立って自分の手許に3年間置いてきた人形「椿子」を和田山の叡子に贈ることにする。

叡子は大層よろこんで、礼状には、「亡き父がいつも私にしてくれてゐたやうに、今私は椿子さんの髪を撫せてやって居ります。」などと記してあった。

父素顔は、彼女の同志社大学在学中に、和田山一の旧家の当主として農地改革の波に曝され、その心労から早逝したのだった。彼女が香律に連れられて鎌倉の虚子の家に来た時には、それから既に3年の歳月が過ぎていたのである。

さて、その丹波和田山では、叡子に贈られた椿子を歓迎するための句会が開かれることになる。そして、その句会の結果を報告する虚子宛の彼女からの手紙には、何人かの椿子をモチーフにした作品が書かれてあったが、そこには何故か椿子を詠った叡子の作品は無かった。

叡子の句は、「夜桜にまじる裸木おそろしく」というものであった。また、

手紙には、「今皆様を送り出した部屋には只椿子と私があるのみでございます。」と句会のあとの様子を記してあった。

ある日、所用で上京したついでに京極杞陽が虚子を訪ねてくる。彼は叡子から頼まれたとあって短冊を取り出して虚子に句を請う。虚子は、「椿子と名付けてそばに侍らしめ」「椿子に絵日傘持たせやるべきか」など、他にも椿の句をも二、三認めたという。杞陽は礼を言ってそれを風呂敷に包んだ。その様子がおかしかったので、虚子は、「何だか恋の使のやうですね。」と言った。すると、杞陽も、「若い娘さんの使ですからね。」と笑った。そして、杞陽が重い鞆のほかに椿子を入れるためのガラス・ケースをも提げて玄関を出ようとする時にはそれは「恋の重荷」といふ感じがした、と虚子は記している。

ところで、この作品の中で、冒頭近くの赤い椿を眺めていて虚子が経験したあの幻影を読んだ時と優劣をつけがたいほどに私をはっとさせたのは、椿子歓迎句会での叡子のこの句「夜桜にまじる裸木おそろしく」であった。

この句はいろいろの意味で象徴的である。先ずいえるのは、この句にはとても性・エロスの匂いがするということだ。無垢な若い女性の性に対するおそれが窺える。桜は、特に夜桜は、死にも繋がる妖しくおどろおどろしい世界を連想させる。その中にまじって裸木が立っているというのである。てらてらとした木の裸体だ。それを叡子は、「おそろしく」と感じたのだ。木の裸体に引きつけられながら、同時に、おそろしさにおののいている。

これが性的なもののイメージだということを本人がどの程度理解していたか、また、そういうことを意識していたかどうかということも判らない。しかし、無意識にせよ、このイメージは、先の不明な性の世界の深い闇の誘惑と怖さを感じ取っている若い女性の内面から出てきたものとして、不自然ではないのである。そして、このところ彼女の経験したことの経緯からいっても、その意識の奥底に、亡父や杞陽や香葎も含めた彼女を取り巻く人達の上にも君臨し、明らかに彼女に好意を示している男性大虚子の像が揺曳してい

## 「椿子物語」考

たと考えても少しもおかしくはないのである。(もしかしたら、同時に、ある意味では、このおそれはその年齢からいっても、虚子からの刺激を媒体とした異性というもののイメージへのそれであったともいえる面もあるだろう。)私自身、作句ほど、無意識のうちに自分でも気付かなかった己の本音が現われてしまうものを他に知らない。

虚子が庭の赤い椿を眺めていて経験したというあの幻影が75歳の虚子の奥底に燃え続けていた性的なるものの生命力を象徴しているならば、それに今相対している無垢な21、2歳の叡子の意識の深層にあるものを象徴しているのがこの「夜桜にまじる裸木おそろしく」だといっても決して言い過ぎにはならないだろう。虚子の赤い椿の幻影と叡子のこの句とは深いところで神秘的に響き合っている。

咲き満ちた赤い椿を眺めていて己の意識の奥底から湧き上がってきたに違いない性的幻影に取り巻かれてうっとりしている虚子。美しく好もしく可憐な50余歳も年齢の離れた若い女性にさっそく人形椿子を贈ったりして積極的に接していきその心を盗んでしまう虚子。(犬飼孝は万葉時代には相手に触れたり自分の触れた物を身に付けさせることでその異性を自分に繋ぎ止めることが出来ると信じられていたと指摘している。)<sup>11)</sup> その女性に手を引かせて「老涼し」などと嘯いている虚子。

虚子は、赤い椿のエロスの幻影を何故見たかということも、叡子に何故椿子を贈ったかということも、あえて追究したり分析したりしようとはしない。これも一つの方法にはちがいないが、実にあっけらかんとしている。(川端康成ならば、『山の音』に於てそうであったように、西洋の影響を強く受けた現代のインテリゲンチャらしく、その心理の深層を繊細に鋭く探っていたはずである。)75歳の老虚子には、62歳の信吾のインテリゲンチャ的な繊細な鋭さやひ弱さは微塵も無い。彼は若い女性から電話で新宿御苑へ呼び出されてそこでデートすることになってもそういう状況に信吾のようにひるんだりどきまぎしたりはしないだろう。また若い女性に対する自分の愛の根底に性的なものが潜んでいるということに気付いたとしても信吾のように悩ん

だりはしないだろう。そういう男女の関係をおそれているのは、『山の音』では信吾のほうであるが、「椿子物語」では若い女性叡子のほうである。老虚子の方には、懼れる風は全く無い。むしろ、平然としてふてぶてしく、これからも積極的にこの若い女性の心を盗み続けていきそうな気配である。

赤い椿の幻影は美しくもあるが、同時に性的な生命力と炎のような猛々しさをも感じさせる。この性的イメージは、同時に、生命力に満ちた勁い虚子の内面を彷彿させて象徴的である。

既にこの文章の中でも指摘してきたように、虚子は、赤い花、特に赤い椿が好きであった。ここで、「椿子物語」に於ける虚子の椿の俳句と『山の音』の中で信吾が引用している俳句とを比べてみよう。くり返しになるものもあるが、「椿子と名付けて側に侍らしめ」、「椿子に絵日傘持たせやるべきか」、「造化また赤を好むや赤椿」、「小説に書く女より椿艶」、「椿艶これに対して老一人」、が虚子のそれである。ここには、生命の勢いがある。これに対して『山の音』の中で信吾が引用している俳句には、逞しさや勁い生命力は感じられない。「老いが恋忘れんとすればしぐれかな」、「死ぬことを知らで下るや瀬々の鮎」、「今は身を水にまかすや秋の鮎」、などがそれである。なお、昭和26年5月の「椿子物語」発表の少し前にも、虚子は生命力の感じられる椿の句を幾つか作っている。「鶉が来てほたりと椿枝しなふ」、「緑一團の芭蕉紅一團の椿」、「椿ただ多き庵と客を待つ」、「鶉こぼれ椿落ちしに非ざりし」。

興味深いのは、この赤い椿と虚子の故郷愛媛との関係である。『伊予国風土記』は、伊予の風土の中の椿を次のように描写している。

椿樹は相覆ひて穹空なし実に五百つ蓋を張れるかと想ふ。臨朝に鳥啼きて戯れ囀る。何ぞ乱げる音の耳に姦しきを暁らむ。丹の花は葉を巻めて映照え、玉の葉ははなびらを弥ひて井に垂る。

言葉のリズムといい、内容といい、椿樹の生命力を讃えている。今日でも伊予松山には椿樹が多くて至る処で目につく。幼少期を松山で過ごした虚子

## 「椿子物語」考

は、椿の花に親しんで育った筈である。ちなみに、虚子と同郷で同世代で宿命的なライヴァルであった河東碧梧桐にも有名な「赤い椿白い椿と落ちにけり」がある。

この親友河東碧梧桐から恋人を奪って妻とした虚子（虚子はこのことでも、漱石の『こころ』の「先生」のように深刻に悩むこともなかったようである。私は寡聞にしてその痕跡を知らない。）、多くの俊秀を育てながら久女や草城を非情に切り捨てた虚子、大きな勢力を誇っていた新傾向俳句運動に対して守旧派の総帥として敢然と闘いを挑んで勝利をおさめた虚子。

高齢となってからも、虚子は健康と体力保持のために歩行を日課とし、営々と俳小屋で伝統俳句の総帥としての仕事を続け、85歳の天寿を全うした。80歳（1954年）で文化勲章を受賞、その時の感懐を「我のみの菊日和とはゆめ思はじ」と詠じた。

他方、『山の音』の作者はどうであったか。川端康成は、外国文学からの影響をも多く受けたが、彼もまた何よりも日本の伝統と美をこよなく愛した。（彼のノーベル賞受賞のスピーチが「美しい日本の私」であるのも象徴的。）彼は長期に亘って名実共に日本の文学界に君臨し、その功績は文字通りかくかくたるものである。1957年には日本ペンクラブ会長として国際ペンクラブ東京大会を成功させる。61年に文化勲章、68年にノーベル文学賞を受賞した。しかし、彼のほうは72年に名声に背を向けて自死の道を選び、73歳の生涯を閉じた。

虚子もそうであったが、川端康成は多くの才能を見出して育てた。だが、彼の一の弟子である三島由紀夫は45歳の若さで師康成に先んじて自死した。

川端康成の文学には死の影がつきまとっていると言われる。『山の音』でも、主人公の信吾の夢の中にはよく死者が出てくる。主人公は死を意識し、それをじっと見つめている。

しかしながら、虚子のほうは、こういう深刻な問題に対しても至極あっけらかんとしている。つまり、「風生と死の話して涼しさよ」となるのである。

何とぶてぶてしく逞しい人物なんだろう。この虚子は、弱冠31歳にして既にぬけぬけと、あの老熟せる「俳諧スポタ経」<sup>12)</sup>なる思想を唱えてみせた。そして、晩年に至っては、それが「明け易や花鳥諷詠南無阿弥陀」となる。これは、近・現代の並のインテリゲンチヤのととても為し得る業ではあるまい。

虚子のこのような逞しく生き抜こうとしてやまない生き方とあの「椿子物語」の赤い椿のエロスの幻影のイメージとが、私の頭の中では実によく響き合うのである。この幻影のイメージは彼の原始的な生命力の証であり、75歳の虚子の性と恋を燃え立たせる原初よりの赤い火ではあるまいか。虚子のずどーんと野放図で力強い「時をもて巨人としたり歩み去る」「去年今年貫く棒のごときもの」「怒濤岩を噛む我を神かと朧の夜」「初空や大悪人虚子の頭上に」「天の川の下に天智天皇と臣虚子と」「銀河中天老の力をそれに得つ」「虚子一人銀河と共に西へ行く」などもこの根源から湧き出して来たのだと思えば素直にうなずけるのである。おそろしい裸木。「夜桜にまじる裸木おそろしく」とは、21、2歳の令嬢叡子は直感的に何と的確にこの巨人の本態を掴み得ていたことだろう。

ちなみに、青春期に老虚子の恋の火の粉を浴びた「椿子物語」のこのヒロイン叡子は、現在も健在で、虚子の法灯を守り継ぐ日本伝統俳句協会の関西支部長として活躍している。そして、人形椿子は彼女から借り受けられ、2000年春に開館した芦屋の虚子記念文学館に飾られている。前衛派の俊才として豊かな才能をフル回転させて伝統派とはまた異なる素晴らしい俳句世界を展開した女流俳人中村苑子も、かつてこの椿子に逢いにはるばる叡子を訪ねて来たと聞く。

## 「椿子物語」考

### 注

- 1) 『高濱虚子全集 第五卷 小説集 (一)』(毎日新聞社, 東京, 1970) 501-502。  
『鶏頭』に付した漱石の序文。  
なお、漱石には、虚子の小説『俳諧師』についての談話があるが、それは、虚子の日和見のようにその日その日の思い付きで書いているような筆法を指摘。全体にむらのあることや風呂のところのくどくどしさなどを批判している。  
『漱石全集 第十六巻』(岩波書店, 東京, 1967) 660-661。
- 2) 『高濱虚子全集 第六巻 小説集 (二)』(毎日新聞社, 1974) 207-384。
- 3) 「椿子物語」『高濱虚子全集 第七巻 小説集 (三)』(毎日新聞社, 1975) 267。
- 4) Ibid., 267。
- 5) Forsythe 家の人々をとおして Victoria 朝時代の功利主義, 物質主義, 保守主義, 陳腐な道德観などの支配した社会に於ける成功と繁栄と崩壊を描いた三部から成る大長編小説。Irene は, そうした体制への反逆者として登場する。
- 6) 川端康成『山の音』, 現代日本文学館24 (文芸春秋社, 東京, 1966) 147。
- 7) Ibid., 184。
- 8) 「椿子物語」267。
- 9) Ibid., 268。
- 10) Ibid. 276-278。
- 11) 犬飼孝『万葉の心』CD (テイチク株式会社, 1999)
- 12) 「俳諧スボタ経」『高濱虚子全集 第十巻 俳論俳話集 (一)』(毎日新聞社, 1974) 114-121。  
俳諧佛という佛様が大法螺を吹いて演べられたこととして俳句の功德を説いている。これを趣味とする者は誰でも俳句によって癒され救済されるという思想を唱えて, 「天才ある一人も来れ, 天才無き九百九十九人も来れ」と呼びかけている。

## On “The Story of Tsubakiko”

Hiroaki DEHARA

Detachment is particular to Kyoshi's attitude in telling stories. He hardly ever reveals himself. However, this short story has one scene in which he reveals himself. The scene is that of the red camellias.

The story is a love story of 75 year old Kyoshi, the narrator, and 21 year old Eiko. At its early stage the story presents the scene of Kyoshi sitting in the garden of his house, watching the red camellias in full bloom there. Those red flowers begin to dance in the air around him. He feels as if he were surrounded by young women and loses himself in ecstasy. Suggesting something very erotic, this scene could be evidence of 75 year old Kyoshi still keeping the fire of eros burning in him.

He falls in love with Eiko when she calls on him for the first time with one of his disciples. Then he takes up a positive attitude. He produces a number of haiku suggestive of his love for her. He even gives the doll named Tsubakiko to her as a present.

Let me compare this story with Yasunari Kawabata's novella *The Sound of the Mountain*, whose theme is also an old man's love for a young woman. Both stories are set in Kamakura, a few years after the end of World War II. Both Kyoshi and Kawabata were citizens of Kamakura.

In Kawabata's story, 62 year old Shingo, the narrator, is shocked to discover a truth by means of thorough psychoanalysis of a very strange dream he had. The truth he digs out is that there are eros and sexual desire latent at the bottom of his love for 20 year old Kikuko, his daughter-in-law. He suffers a lot from this morally. He examines himself minutely in view of his conscience, which Kyoshi never does. Shingo is baffled and



## 「椿子物語」考

feels uneasy about his date with Kikuko. He has qualms of conscience, which Kyoshi would never have in the same situation. Kyoshi has a lot more nerve. He is beyond the weakness and susceptibility of the modern Japanese intelligentsia which Shingo represents. Kyoshi is bolder, stronger-minded, primitivistic, rooted in Nature itself, little influenced by modern Western thought.

Kyoshi prefers the red camellia above all, which is symbolic of vitality, the fire of life, something primitive. A hundred haiku of his take the red camellia for their motif.

In this story Eiko also makes a haiku: "I fear the naked tree among the cherry blossoms at night." The naked tree seems to symbolize something erotic, which attracts and at the same time scares Eiko, a virgin. She doubtless senses Kyoshi's erotic feelings for her.

The things I point out above reveal Kyoshi's character. Kyoshi is quite different from Shingo who is a typical modern Japanese intellectual. He is a sort of sphinx in modern Japan.

(With his strong will to live, Kyoshi took care of himself and sustained his reputation as one of the greatest haiku-poets until he died at the age of 85, while Kawabata, Nobel prize winner, committed suicide at the age of 73.)